朝日新聞 2023年5月12日（金）夕刊

英訳 AIと人間どう違う

①自力 ②機械翻訳 ③チャットGPT 立命大生、授業で実感

対話型人工知能ChatGPT（チャットGPT）と人間との違いを、英訳を通じて学ぶという授業が、立命館大学で始まった。のぞいてみると、恥ずかしがったり喜んだり、思いのほか盛り上がっていた。

4月下旬、びわこ・くさつキャンパス（滋賀県草津市）の教室で、生命科学部2年の学生たちがパソコンのツールを使い、各自異なる日本語文を与えられ、それぞれ3通りの英訳をする課題に取り組んでいた。

ChatGPTを使った英語の授業を受ける立命館大学生＝滋賀県草津市

教育には「革命的」

一つが「自力」、もう一つが旧来のサービスを使った「機械翻訳」、そして「チャットGPT」を使った英作文。最終的に他の学生にそれぞれの「作者」を考えてもらい、特徴を知ってもらう狙いだ。

例えば「髪形」という言葉を、学生は「hairsty le」と表現。一方でチャットGPTの提案の中には「hairdo」という単語が使われたものがあった。学生は「自力の文章が下手でバレバレだ」と悩んだり、「自力と機械翻訳が同じになった」と喜んだり。「作者」の見分けがつきにくい文章も、そうでない文章もあった。

青山愛さん(19)は「面白かった。チャットGPTは遠回しでもニュアンスまでうまく表現しているものがあって学びになる。どんどん使ってこのレベルに追いついていきたい」と話した。チャットGPTについては「見慣れない表現が多く、日本人同士では使いにくいと思った」「難しくて読みにくい」という意見もあった。

授業後、課題を出した山中司教授（応用言語学）は「学生には事前に情報をインプットしていないのに、『使い分けが大事』などと客観的に見られていた」と評価。チャットGPTなどの進化について「普通の学習者が一生懸命考えても言えないレベルの英語を出してくれる。英語教育にとって革命的な出来事だ。『使うことがずるをする』みたいなイメージ、価値観を変えていきたい」と語った。

院生がツール開発

実は、授業で使われていた英語教育ツール「Trans（トラン）able（サブル）」も、同大の大学院生がチャットGPT自身とやりとりしながらプログラミングした。作成した理工学研究科博士課程の杉山滉平さん(28)が開発を始めたきっかけは「英語の論文を書くときに楽をしようと思った」ことだった。

もともと論文を日本語で書き、英訳するため、機械翻訳を活用していたという。示された英文の意味やニュアンスが正しいのか再度機械翻訳で和訳し、意図した日本語になるか確認する作業を繰り返していた。

この手間を省こうと、同じ画面上で翻訳と逆翻訳ができるツールを開発。電子システム専攻で、プログラミングの経験は少なかったため、エンジニアのアドバイスを受けて1カ月ほどかけてつくった。

さらに山中教授らの提案から、チャットGPTによって、他の種類の英訳や、英文に対して参考書のような解説まで表示されるツールに進化させた。プログラミングでわからないところはその都度チャットGPTに聞いたため、今度は1週間ほどで基本形が完成したという。

杉山さんは「チャットGPTによって基本的な知識を身につけながら、プログラミングできた」と振り返る。今後は「書く」だけでなく「読む」「話す」「聞く」の要素を含め、個人に合わせた教育ツールに発展させたいという。

チャットGPTの授業への活用は甲南女子大学（神戸市）も始めている。文学部メディア表現学科2年生の授業で、模擬授業を考えるグループワークに使っている高尾俊介准教授（プログラミング）は「適切に使用することで人間の創造性を始めとした能力を大幅に向上する効果が期待できる」としている。

（鈴木智之）